読売 俳壇

矢島 渚男 選

渦潮は遊び場鯛を引き抜けり　南島原市　酒井　月子

【評】釣の句であろう。渦潮が鯛の遊び場だからそこへ針を投げ込んで引き抜くように釣り上げる。「引き抜く」が面白い。

鈍行の旅のゴールや座禅草　長岡京市　みつきみすず

【評】鈍行列車で山中に座禅草を訪ねた。むかしの話だが、新幹線よりも鈍行の旅の方が楽しかったものだ。むろん距離にもよりますが。

納沙布岬一夜で消えし浮氷　にかほ市　渋谷　正秀

【評】この岬は根室半島の東端で流氷見物で有名。着いた夜は氷原が広がって明日はと期待したのだが一夜ですっかり消えていた。残念。海の氷は突然消えることがあるらしい。

大漁旗倉庫に眠る冬の漁村　札幌市　佐藤　学

開花日を待ちて冷たき桜の木　福岡県　高瀬　忠

囀りや秩父事件の札所寺　秩父市　辺見　弘

靴下を脱ぎ登り棒百千鳥　広島県　三宅千恵美

園児らのかたまり癖や潮干狩　神栖市　桐本　博昭

しりとりは続く日永の保育室　春日部市　相沢　明子

馬の子も子どもの顔をしていたり　宮崎市　長友　聖次

高野ムツオ 選

ふらここや下りはじめて見えるもの　前橋市　内藤　光

【評】空へ飛び出し空中散歩をしている気分になるぶらんこ。漕ぐのを止めるのは寂しいが、眼下に目をやると、見知っていたはずだが、漕ぐ前とはまた違った世界が広がっている。

猫のことは猫しか知らぬ春の宵　名取市　里村　直

【評】そうそう、猫の恋などと知ったかぶりをして人間が詮索するのはやめましょう。猫には猫の、人には人の、知られざる恋路がある。

たたまれて舟にもどりし紙風船　東京都　吉村　恵子

【評】薄暗い天井に舞い上がって子供達の歓声を誘った紙風船。丸い形はそのまま子供達の夢の形だった。元の舟に戻り、そして眠りにつく。

雲わらふまで風蹴り上げし半仙戯　大和市　おおもりじゅん子

引かれまじくと草の根の深きかな　宝塚市　広田　祝世

津波知る潮へ手を添へ若布刈る　仙台市　佐藤　庄陸

年齢も場所も忘るる苗木市　八王子市　徳永　松雄

太陽の力こぶなり蕗の薹　対馬市　神宮　斉之

飾りたる時間もともに雛納　香川県　福家　市子

道行きの酸素ボンベと花吹雪　川越市　益子さとし

正木ゆう子 選

落第を恥と思はず哲学科　志木市　谷村　康志

【評】なぜか、何となく、ユーモラス。これが他の科目なら、違う印象かも。哲学者は落第ぐらいでは動じない、のか。独創的な思索に耽るあまり、勉強する暇が無かった、のか。

卒業のあとの君知る人もなく　島根県　重親　峡人

【評】同窓生の中には、何十年たっても小まめに皆と連絡を取る人もいれば、そうでない人も。住所も消息も知れない君は、今どこで何を。

花筏付かず離れず離婚せず　小田原市　北見　鳩彦

【評】ず、ず、ず、と調子良く韻を踏みつつ読んで、下五で吹き出しそう。年数を重ねた夫婦とはこんなものかもしれない。美しい季語が救い。

恋猫になることもなく猫老いぬ　東京都　中島　徒雁

街道や戸をすこしあけ雛飾る　京都府　山田　国雄

涅槃寺庫裏に卓球台置いて　大阪市　今井　文雄

田に残る雪と見まがふ白鳥よ　会津若松市　安藤　和繁

海はまだ固くて痛いと海女上がる　東京都　吉田かずや

鳥雲に老いて自信のやうなもの　神戸市　吉野　勝子

笑ふから楽しいと知り卒業す　北本市　萩原　行博

小澤 實 選

サーカスの象の背に乗り春来たる　東京都　石井　秀一

【評】春という季節が、サーカスの象の背中に乗ってやってくる、というのだ。ちょっと不思議で、どこか懐かしい、春という季節をよく捉えていると思った。

チェーンソー巨大欅を剪定す　入間市　松原　正憲

【評】チェーンソーを用いて、巨大な欅の木をどんどん剪定してゆく。のこぎりなどを使っていたら、いつになったら終るのかわからない。

永き日や少年院の高き塀　つくば市　小林　浦波

【評】春の午後、少年院を通りかかり、高い塀を見上げた。塀の中には外に出ることを切望している少年が内側から見上げているかも。

口笛の鳴る子鳴らぬ子野に遊ぶ　静岡市　山本　正幸

電柱に電気工事士鳥さかる　京田辺市　加藤　草児

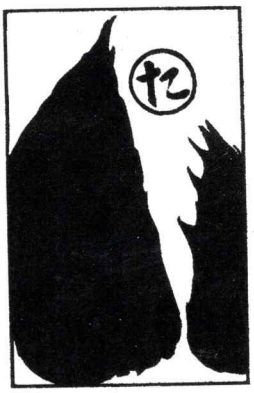
菜の花忌『街道をゆく』読破せし　守谷市　久保田洋二

スケボーの空中ターン風光る　神戸市　遠藤　音々

猫の恋君も私も傷だらけ　高岡市　池田　典恵

をちこちにソーラーの屋根春満月　日立市　菊池　風峰

麗かや信号待ちの霊柩車　相模原市　はやし　央



題字デザイン・イラスト　福田美蘭

短歌あれこれ　石川美南（歌人）　図書連のいた場所

通っていた中学校には「自分のクラス以外の教室に入ってはいけない」という謎の校則があった。私にとって、他クラスの子と交流できる唯一の部屋は、昼休みの図書室だった。メンバーはほぼ固定で、私は彼らを勝手に「図書連」と呼んでいた。手には一冊ずつ本を持っていたが、（本の虫だったIくんを除けば）誰もろくに読んでいなかった。たぶん皆、あの場所にいること自体が心地良かったのだ。

図書室一番乗りを私と競い合い、廊下を全力疾走していたAくん、元気かな。休室日に小さな地窓から中に忍び込んで平然と本の続きを読んでいたIくんも、卒業後は会っていない。

私はあの頃出会った短歌をずっと続けていて、図書連の延長みたいな短歌仲間がいる。でも、図書室のことは忘れないし、いつかもう一度あそこに帰る気さえしている。

ストーブの上を特等席として我ら海底二万海里へ